ard、ブールガン、シミアンなどの協力もある。それらを発表の年代順にみると第一巻にジンメルG. Simmelの「社会の形態はいかにして維持されるか」、'Comment les formes sociales se maintiennent'、第三巻にラッツエルRatzel、「土地、社会および国家」'Le sol, la société et l'état'、リシャールG. Richardの「社会の危機と犯罪行為の諸条件」('Les crises sociales et les conditions de la criminalité')、およびスタインメッツSteinmetzの「社会的類型の分類と諸民族のカタログ」(La classification des types sociaux et catalogue des peuples)があり、第四巻にブーグレC. Bouglé の「カスト制度の考察」'Remarques sur le régime des castes'、シャルモンCharmontの「同業組合財産消滅の原因」Note sur les causes d'extinction de la propriété corporativeが現れた。つづいて第五巻になってはじめてシミアンFr. Simiandの「石炭の価格についての考察「Essai sur le prix de charbon」という経済社会学的考察が現れ、第六巻にはデュルケームの「分類の未開形態」とならんでブーグレの「晩近の分業に関する理論についての考察」'Revue générale des théories récentes sur la division du travail.'が出てくる。第八巻にはブールガンH. Bourginの「産業の形態についての考察:19世紀パリーの食肉業」'Essai sur une forme d'industries: L'industrie de la boucherie à Paris au 19e siècle.'、第九巻にはメイエの言語社会学の論文「語はその意味を変えるか」Comment les mots changent de sensが登場してき、年報の多彩性が明らかになってくる。第十巻にはユヴランやエルツの宗教教会学の考察のほかにブーグレの「インドのカスト考察」"Note sur le droit et la caste en Inde"現れてくる。

年報の第一輯ではこれで独自の論考は終わっている。次の十一巻の序文でデュルケームは数限りある協力者では毎年のようにmémoiresをのせることは不可能であり、出発点からの目的である隣接諸科学の文献紹介も協力者の努力も力つきた感じであるが、そちらを充実させるため、一応11巻、12巻には独自の論考はのせないことになったと説明がのせられている。それは協力者の内論もめということより、第一次大戦もはじまり協力者で戦争への召集で人員が不足したため一時休業しなければならない事情も出たため、とられた止むを得ない措置によるものといえる。

ところでベナールPhil. Besnardは社会学年報の協力者チームはデュルケームの一存で、仕事の分担をしたのではなく、チームの組織は単純な一枚岩のようになって動いたわけではなく、また協力者の考え方もすべてが同質的なものばかりではなかったと分析している[27]。そういう状態と今日のように社会学の市場が広かったわけではなかった時代のことを考えるとこの種の刊行物を定期的に、良心的に刊行しつづけるための財政上の負担を含めた負担が重荷となっていたと想像される。たとえばG. Richardは個人的事情から第九巻以後の年報協力者から姿をけしている。詳しいことを本稿の中でつくすことはできないが、この年報の最も中心になったデュルケーム、モースを中心とする人びとの間でさえ、考え方が全く同じだったわけではなかったし、デュルケームは組織的に自分の考え方を押しつけたわけではなかったことはこのことで明白であろう。とくに供犠についての見解においても、デュルケームとモースの間には完全な一致があったのではなかったことは両者の著作を長期にわたってよんで見れば何人にも気づかれるものである。Durkheim-Mausseの中心線はもっと一貫した、同質性の強いものと考えていた筆者はたとえば「分類の未開形態」などの考察ではそういうことがあるとは予想できなかったことである。しかし、デュルケームとモースの協力は年報の刊行について少しもゆるぐことはなかったばかりか、デュルケームの時期尚早の死後モースが第二輯の刊行を悪条件の下で継続していったのはこの年報の刊行のもつ意義と目的達成のため私情をこえての努力の意志が強いからであったからにほかならないのである。

それとともにこの年報の独自の論考にドイツジンメルをはじめオランダのスタインメッツ、ドイツのラッツエルの寄稿があったことは特筆さるべきことである。当時の状況においてこれだけ国際

27) Philippe Besnard, ('ed). The *sociological Domaine* chap. 1.